

## 中支を征く（百六師団）

大分県 羽田野 徹

大正六年七月十九日生れの昭和十三年徴集兵であります。当時既に支那事変は戦線を拡げつづけ、国内は蔣介石厲懲の声に満ち満ちていました。昭和十三年九月十日、補充兵として野砲歩第六連隊（第六師団）補充隊に入隊しました。教育を充分受けぬまま翌月十五日には馬輸送のため門司港を出帆です。上海戦は緊迫し、兵器・馬匹の輸送が緊急の要務だったため、私たち初年兵も上海へ派遣されたわけです。十二月三十日、上海を出帆し、昭和十四年一月四日、門司港へ着いたのです。

ところが、翌一月五日、一等兵に進級ですから、馬輸送間が一期の検閲ということでした。更に驚いたことに、野砲兵第一〇六連隊（第一〇六師団）、松浦部隊（師団長松浦淳六郎中将）、宇賀部隊（連隊長宇賀武中

佐）、小屋迫隊に転属を命ぜられ、翌六日、屯営出発、七日門司港出帆、八日、上海上陸という、まことにあわただしい行動です。いくら軍隊とはいえ、一月四日に上海から帰り、進級、転属のうえ、一月七日門司出帆ですから内地の土を踏んだのは丸三日間だけです。翌八日には再び上海へ上陸しました。

何故このように私たちの部隊が補充されたかは、当時の支那事変の戦歴をみれば一応は納得出来ると思います。

### 【参考解説】

昭和十二年八月 上海事変勃発、四個師団動員と四個師団動員準備

九月 上海方面増派のため第一〇一師団等第五次動員下令。

十一月 第十軍（柳川軍司令官）杭州湾上陸、上海戦線の背後をつく。中支那方面軍編成（松井軍司令官）中支那方面軍南京占領。

昭和十三年 陸相、長期戦に臨時將兵の心構えを全

軍に訓示。

五月 第十三師団徐州占領。

六月 中支派遣軍・海軍、安慶占領。

七月 張鼓峯事件。

八月 政府「支那事変処理方針」決定。

九月 広東攻略作戦関係兵団幕僚作戦打合せ。

十月 第一〇六師団江西省徳安で中国軍に包囲され苦戦。広東地区占領。漢口、武昌、漢陽（武漢三鎮）占領。

十一月 近衛首相、東亞新秩序建設声明す（中国現政府参加拒否せず）。蔣介石、重慶で徹底抗戦決意演説。

十二月 近衛三原則（善隣友好・共同防共・経済提携）声明。

昭和十四年一月、近衛内閣総辞職。

二月 海南島占領。中国軍機数機台湾に来襲。

三月 航空部隊重慶猛爆。ヒットラー、チェコ侵入。

二月十日 第一〇六野砲兵連隊第六中隊に編入。二十日 箸溪付近警備並に戦闘参加、これが初陣とい

えます。

二月二十七日より三月二日まで南昌攻略戦、箸溪付近より徳安西南地区に前進。

三月二日より三月二十一日まで修水河戦参加。

私が参加したこの修水河渡河作戦について述べます。

「国を出てから幾月ぞ、共に死ぬ気でこの馬と、攻めて進んだ山や河、執った手綱に血が通う」私たち野砲兵は馬部隊で野砲は鞍馬によって行動出来るのです。

「おい若松（私の旧姓）、おい若松」と言う声にふと目が醒め我にかえる。よく五十年前の夢を見ます。今だに頭から消えぬことがあります。

昭和十四年三月二十日、修水河渡河戦前のことからお話いたします。昭和十四年一月一日、午前零時、敵逆襲との緊急報告です。当時元旦には百一発の実弾を敵陣地にぶち込んで祝砲にかえることになっていたところで、あわてることなく中隊砲列に報告するとともに準備したとおり射ちまくりました。我々、百発百中の射撃効果を挙げ、沈着に敵を撃退させ、しかも我方人馬共に何等損害もなく、小屋迫隊の勇名を天下に轟か

したといひます。

その後、前に述べた二月十日、押領司少尉たち十六名（私を含め）が此処で充員されて勢いが出来たので、新しい中隊編成により、二十六日当地出発、いよいよ修水河渡河戦へと向かったのであります。

連日降ったり、やんだりの雨、工兵隊が新しく造ってくれた道です。しかも、その道を次々と何千何万という人馬、車両が通るので、泥濘は腰を没するというが、泥濘馬原に達するぬかるみです。それこそ、人馬一体となって気合づくめの難行軍でした。

修水河渡河作戦は三月二十日午後四時を期し、全軍大小さまざまな砲門、三百五十門は開いて一斉に開始されました。それぞれの砲弾は午後六時までに射ち終え、夕闇迫る川面に、また山間に響きわたり、この世とも思えぬ凄惨さでした。

この時、我が中隊の三分隊に敵の迫撃砲弾が命中して沢山の負傷者、戦死者を出しました。まず負傷者の収容です。惨状は目をおおうものがあり、肉片や血が飛び、既に戦死された人もあります。私たちは夢中で

戦友を収容し纏帯所へ運びました。

更に部隊は前進で、闇の中を歩き廻り、空が明るくなってやっと方位がわかりました。二十一日の明け方大砲、人馬とともに渡河が始まりました。小銃弾が何処からともなく、ピュン、ピュンと飛んで来る。そんな危険の中無事渡河を終わり小休止となりました。

周囲を見て廻ると、中国兵の死体の中に日本兵の戦死体がおりましたので、直ぐそばまで行きますと、鉄冑がザクロのように裂け、壮烈な戦死でした。背のうを取り、鉄冑をはずし、背のうからタオルを出し、頭を包み、外套を掛け、日本兵と判るようになりました。

その時、戦死者の手帳に昨日までのことが書いてありました。母のシゲノさんが見送りに現隊に来た様子や、熊本県南関街猿渡熊雄とあり、一寸の時間でしたが、余りにも強烈な印象で、いまだに頭に残り、一生忘れたいとは思っています。

第一〇六部隊（師団）は前進停止の命令が出ました。次の目的地「南昌」は第一〇一師団の手によって完全に占領されましたので、南昌警備は第一〇一師団。我

が第一〇六師団は奉新及安義地区の警備の任につくべしという命令を受けました。私共小屋迫隊も後戻りして奉新へと向かいました。これから南昌攻略と、意気込んでいたので、何か気の抜けた感はありません。奉新付近の警備のため四月から九か月もおりましたが、その間マラリアで多くの戦友を失いました。

次に軍歴を列記してみますと、

九月十三日より二十一日まで、贛湘会戦（贛Ⅱ江西

省、湘Ⅱ湖南省）高安（瑞州）付近の殲滅戦参加。

二十二日より十月十八日まで、贛湘会戦冗岑及修水

河孟の戦闘参加。

十月十九日より十一月二十五日まで贛湘会戦後の警備。

第一〇六師団の師団長は中井良太郎中将ですが、昭和十五年四月内地復帰の命があり、私達は独立混成第十八旅団砲兵隊に転属になりました。

独立混成第十八旅団は安義において、昭和十四年十一月七日に編成され、旅団長は萱島高少将、旅団砲兵隊長は山崎周一郎中佐でした。同旅団は独立歩兵第九

十二、九十三、九十四、九十五、九十六の五個大隊と、旅団砲兵、同工兵、同通信隊で編成されたのです。

十一月二十六日、転属以来の軍略歴は次のとおりです。

十二月七日まで編成及び輸送業務。

十二月八日より二十六日まで十四年冬季作戦における武寧付近の警備・戦闘。

昭和十五年一月十日より三月十五日、部隊は漢口移駐となりその輸送業務。

三月十六日より四月二十八日、十四年冬季作戦後における武漢付近警備。

四月二十九日より七月三十一日、宜昌作戦（長沙作戦中）における武漢付近の警備。

八月一日より三十一日、當陽（宜昌東方約五十キロ）付近に移駐に伴う輸送。

九月一日より十一月十六日、當陽付近の警備並びに戦闘。十七日より三十日、漢水作戦における潭河、

河孟並びに當陽付近の戦闘。

昭和十六年三月一日より五月四日、豫南（豫は河南

省の略称) 作戦後における警備。

五月五日より江北殲滅作戦、遠安並びに観音寺北方

地区の戦闘。

五月十六日より七月十二日、江北作戦後に於ける當

陽付近の警備。

七月十三日より二十六日、皂市付近の警備並びに戦

闘。

二十七日より九月四日、皂市付近の戦闘並びに輸送

業務。

中支における業務はこれで終わりました。

九月四日、兵長に進級し、西部第二十一部隊に転属を命ぜられ、同日京山(湖北省西部応山西北方)を出

発。同月十日漢口出発。十六日宇品上陸。二十日西部

第二十一部隊到着、二十数日間同部隊に居り、十月十

六日に召集解除となり、滿三年一か月余の軍隊生活を

終わりました。

憶えば戦死、戦病死をされ、故国に生還出来なかつた多くの先輩、戦友、後輩の方々に對し歌を記します。

皇国に身を捧げ 花と散りにしますらを

幾千代かけて 靖国の神としまつる時は来ぬ

### 【解 説】

独立混成第十八旅団は「広部隊」となり、中支第一軍の隷下で勇名を馳せました。その後旅団は、昭和十七年二月、独立歩兵第九二、九三、九四、九五、九六、一〇六、一〇七、一〇八の独立歩兵八個大隊、二個旅団(第五十一、第五十二)及び、師団工兵隊、師団通信隊、師団輜重隊、野戦病院、病馬廠を以て、第五十八師団とし編成されました。

昭和十九年、二十年の湘桂作戦においては長沙、衡陽、全県で奮戦、更に桂林攻略、作戦末期には広西省より、撤退する第十一軍の基幹部隊とし功を挙げました。

江西省の南昌を中心とする一帯の敵は、かつての上海にも比すべき堅固な陣地を十重はた重に築き、羅卓英を総指揮官とし、東方地区を商震の第三十二軍、西方から南方地区を欧振の第四軍、王敬久の第二十五軍、修水河付近に夏首助の第七十八軍を配して、総兵力は

一七個師約二十万といわれていた。

このような大軍で水も洩らさぬ戦備を整え、殊にその第一線たる修水河一帯には長遠な縦深陣地を設け、中央（蒋介石）直系軍七個師が頑張っていたので、この渡河戦は空前の作戦であった。